

高校生・大学生の人権意識について

— 現代青少年の人権意識についての調査から —

影山清四郎・重松克也

Research for Consciousness on Human Rights of Senior High School's and University's Students

— Through Investigating the Nowadays Youth's Consciousness of Human Rights —

Seishiro Kageyama & Katsuya Shigematsu

1 本稿の課題と調査の概要

本稿は昨年度本紀要に発表した「中学生の人権意識について (I)」(①) の続編である。今回は高校生・大学生の人権意識を対象に論ずるので、(II) を付すことなく、表題のようにすることにした。しかし、本稿の基礎資料は前回と同様に、筆者が文部省科学研究費補助金をえて実施した中学生・高校生・大学生の人権意識に関する調査(1998年2月及び7月実施)である。本稿はその調査資料に基づき高校生・大学生の人権意識について新たなデータ分析を行ったものである。

調査の意図については、前回の論文やこの調査結果をまとめた報告書で述べているので省略する。調査は、高校生については、卒業生の勤務する神奈川の高校4校の1年及び2年生を対象として、合計517名から回答をえた。中・高・大の回答数を平均化するために、高校生についてはEXCEL97のサンプリング機能を用いて、無作為抽出による293名を分析対象とした。大学生については、東京・千葉・神奈川の4大学の学生1～3年生277名である。

調査項目は、中学生・高校生・大学生とも共通で、①人権という言葉に関するイメージ、②自由や人権についての考え、イメージ、③人権についての情報源、④人権問題を意識した場面、⑤自由や平等の理念と現実の乖離についての評価、⑥具体的問題場面における判断と解決策、⑦人権に関する知識、⑧人権に関する教科と授業、⑨自己意識について、からなっている。

③や⑦の情報を基にして、④の人権問題に遭遇し、①や②のイメージを形成し、⑤⑥の評価や判断・解決策が生じるのではないかと考えたのである。その根底には⑧と⑨の授業と自己認識があるのではないかとという仮説をもって調査項目を作成した。

本稿では、②の高校生・大学生の考える自由と平等と⑤や⑥の具体的問題場面をクロス集計することによって、高校生・大学生の人権意識の一端を分析してみたい。前回の中学生の分析にあったのは、自由を中心に分析を行ったが、今回は他者(社会)との関係が問われる平等を機軸にして、クロス集計を行うことにする。

2 高校生・大学生の自由に関する意識

自由という言葉から思い浮かべる考えやイメージを以下の選択肢の中から2つ選んでもらった。a 他人から何もいわれないこと、b ルールの中でふるまうこと、c 自分らしさを大切にすること、d 他人との関係よりも個人を中心に考えること、e 個人だけでなく他人のことも考えること、f 法律などによって国家が個人にできるだけ干渉しないほうがよい、g 皆の幸せのためには制限されることもある。

質問は2つの選択であるが、始めにa～fのどれを選んだか（単選択と呼ぶ）を示し、その次ぎに組み合わせ選択の上位4つを示すことにする。（以下、全て単位は%、少数第2位で四捨五入してある。括弧内は実数、単選択は複数選択のため、調査人数よりも多くなっている）

表1 [自由に関するイメージ、単選択]

選択項目	a	b	c	d
中学生	36.3 (129)	18.9 (67)	54.7 (194)	8.2 (29)
高校生	26.7 (78)	24.3 (71)	62.2 (182)	8.9 (26)
大学生	14.4 (40)	30.3 (84)	59.9 (166)	9.8 (27)
	e	f	g	
中学生	18.6 (66)	7.0 (25)	32.5 (115)	
高校生	16.8 (49)	8.9 (26)	29.5 (86)	
大学生	21.0 (59)	4.3 (12)	41.2 (114)	

表2 [複数選択]

選択項目	a－c	b－c	b－g	c－e	c－g
中学生	11.6 (41)	22.2 (22)	5.1 (18)	8.7 (31)	14.0 (50)
高校生	11.3 (33)	8.6 (25)	7.2 (21)	9.9 (29)	13.0 (38)
大学生	6.1 (17)	8.3 (23)	10.5 (29)	7.6 (21)	18.1 (50)

表1の単選択からもわかるように、中学生～大学生の最も多い選択はcの「自分らしさを大切にすること」で、50%を越えている。反面、その「自分らしさ」は、dの「個人中心」よりもeの「他人との関係重視」を選択する者が多いことからもうかがえるように、けっして自己中心的に「自分らしさ」をとらえているわけではない。だが、中学生・高校生においては、aの「他人から何もいわれない」こととgの「皆の幸せ」が、ほぼ拮抗している。またaやgに比してbの「ルール」が低い数値を示している。他者との関係で自由をとらえようとしているのだが、その他者が身近な他者であって、客観的な存在としての他者一般ではない。身近な人間関係を念頭において自由を意識しているといえよう。それに対して、大学生は、aが著しく低くなり、bやgが高いのは社会の中において「自分らしさ」をとらえようとしていると考えられる。いわば遠い他者が視野に入っているのである。社会的な自己という把握が、高校生までと大学生と異なるといえよう。それは子どもの社会化とか公民的資質の形成という社会科教育の目的からみれば、「望ましい」発達の姿を示しているが、dの個人中心を脇においていないかという危惧が残ると

ころである。

表2の複数選択の結果は、上記のことがほぼあてはまる。どの学校段階においても多いのは、 $c-g$ である。前回の中学生の人権意識の分析においては、それを客観的關係重視型と名付けてみた。次に多いのは高校生においては、 $a-c$ の自己中心型とも名付けられるタイプであり、大学生は $b-g$ の客観的ルール重視型である。いずれも自分らしさを軸にして他者やルールとの関係において自由を考えようとしているのである。しかし、高校生は $c-g$ と $a-c$ 、 $c-e$ が13.0%と11.3%、9.9%とほぼ同じであるのに対して、大学生 $c-g$ は $a-c$ の3倍近くの差がある。高校生は客観的關係重視($c-g$)にやや片寄りながらも、自己中心($a-c$)と主観的關係重視($c-e$)も合わせもっているのである。それだけに自己を中心とした身近な関係から自由をとらえているといえよう。大学生は、自分らしさを他者やルールという覆いでくるみ、自己(利己)を突出させることが少ない。そこに社会性の発達を読み取ることができるのだが、抽象化・一般化にながれてしまうのではないかという危惧を思わざるえない。制度やルールといった私たちを取りまいている社会的関係と私らしくありたいという願いの調整をどのように図っているのか、より社会的関係が問われる平等観について次にみてみよう。

3 高校生・大学生の平等に関する意識

平等という言葉からどんな考えやイメージを思い浮かべるのか、下記の選択肢の中から2つえらんでもらった。

a 皆が同じであること、b 個人の能力が発揮できること、c チャンスが皆に同じように開かれている、d 社会的に弱者を生み出さない、e 各人の平等は、法律などの国の働きによって確保される、f 平等は各人の自由な競争の中で確保される、g 皆の幸せのためには、自分が不利益になることがある。

先の自由と同じように、単選択と複数選択の両方を示してみよう。

表3 [平等に関するイメージ、単選択]

選択項目	a	b	c	d
中学生	63.7 (226)	18.6 (66)	38.6 (137)	40.6 (144)
高校生	46.6 (136)	23.0 (67)	48.0 (140)	37.7 (110)
大学生	28.5 (79)	28.2 (78)	63.9 (177)	29.6 (82)
	e	f	g	
中学生	3.7 (13)	5.4 (19)	7.0 (25)	
高校生	3.1 (9)	13.0 (38)	9.6 (28)	
大学生	9.8 (27)	9.8 (27)	13.4 (37)	

表4 [複数選択]

選択項目	a-c	a-d	b-c	c-d
中学生	18.9 (67)	21.1 (75)	6.8 (24)	6.5 (23)
高校生	15.4 (45)	13.4 (39)	8.6 (25)	12.0 (35)
大学生	11.6 (32)	6.1 (17)	15.9 (44)	13.4 (37)

平等に関しての考えやイメージは、先の自由に比して自己の内面と切り離して、外的世界の問題として対象化するためか、学校段階に応じて規則的に変化している。単選択において高校生のf以外、a・dは中学生を最高値にして中・高・大の順になっている。b・c・gはその逆で大学生になるほど高い数値を示している。高校生のeの3.1%も中学生とほとんど差がないので、後者に入れてよいだろう。

aの「皆が同じである」は素朴な平等観を示すものであり、dの社会的な弱者を生み出さないという選択肢は実質的平等への志向を示している。それに対して、bとcは形式的平等を指し、cの方がよりその方向を指向していると考えられる。eは、法的な枠組みの中で平等をとらえ、gは他者志向を含んだ選択肢である。

大学生になるに従って素朴平等観が減少するのは当然であろう。又、中学生において実質的平等を選択する者が多いのは、「皆同じであるべきだ」という素朴平等観と同質のものと考えられる。高校生は、素朴平等観(a)とcの形式的平等がほぼ同じであり、実質的平等(d)はそれより10%近く低い。高校生は素朴な形式的平等を志向しているといえよう。大学生は、実質的平等よりも2倍以上の者がcの形式的平等を選択している。しかも、bの能力の発揮を形式的平等に加えれば、形式的平等志向が強いといえよう。このように、中学生は素朴平等観、高校生は素朴形式的平等、大学生は客観的形式的平等を志向しているとまとめることができる。

しかし、反面、どの学校段階でも平等を法的枠組みの中で考えるのがきわめて少ないことが特徴的である。形式的であろうと実質的であろうと国家(法)の介入によってしか実現できないにもかかわらず、そこに着目する者は少ない。こうしたアンケート形式の調査の宿命でもあろうが、回答者は私を主語として回答する。したがって、主体的ではあるが客観的でない選択肢が選ばれるのではないだろうか。

複数選択をみてみよう。ここでは、上記の単選択以上に学校段階に応じた選択となっている。高校生はa-c、a-d、c-d、b-cの順になっている。それぞれにネーミングすると、素朴形式的平等、素朴実質平等、形式・実質平等併立、客観的形式的平等という順になる。大学生は、b-c(客観的形式的平等)、c-d(形式・実質的平等併立)、a-c(素朴形式的平等)、a-d(素朴実質平等)の順になっている。大学生の単選択で多かった他者志向の要素をもったgを含んだ選択は、c-gの4.0%(11)を最高にしているだけである。

ここで注目されるのは、c-dを選ぶ高校生・大学生の意識である。形式的にも、実質的にも平等であってほしいと誰しも願うことである。しかし、その両者を満足させることは困難であることも明らかである。なのに、両者を願う高校生・大学生の意識はどこにあるのであろうか。高校生にあっては、c-dはa-c・a-dに次いでいるが、a-dと僅差である。

大学生においては、c-dはb-c(形式的平等)についている。高校生は「皆同じ」とい素朴な平等主義を志向し、大学生は客観的形式的平等を志向しているといえよう。大学生は、主観的・客観的であろうと、形式的平等を志向しているのに対して、高校生は客観的形式平等(b-c)よりもa-dに象徴される身近な他者との関係において、換言すればそれだけ自己を介在させて、平等をとらえようとしていると考えられる。先のc-dと並んで、高校生のa-dや大学生のb-cの平等観の持ち主が、具体的な問題場面に遭遇した場合、どのような評価を下すのであろうか。以下、具体的問題場面とクロスしてみることにする。

4 平等と具体的問題場面

具体的問題を以下のように設定してみた。質問は「日本国憲法は『法の下での平等』を保障していますが、次の事項は『法の下での平等』に反していると思いますか」と、各事項について「反していると思う」を1とし、「反していないと思う」を5として、5段階で評価してもらった。ここでは、以下の3つを分析対象として取り上げることにする。

- a 「学区の指定により、行きたい学校に進学できないとき」
- b 「勤続年数も同じで、同じ仕事なのに能力によって給料に差があること」
- c 「自分の住んでいる町に、他の町のごみを処理する焼却場が作られること」

aは高校生にとって身近かに体験した事柄として、大学生にとっては通り過ぎた体験として設定してみた。bは将来直面する問題ではないかと考え設定した。cは、a・bと異なり個人の利害に直接的に結合しないが、地域住民の一員としてこのような問題をどう評価しているのかを聞いてみようとしたものである。先の平等観を軸にして、この3つの問題場面の評価をクロス集計してみよう。以下、高校生・大学生全体の選択結果は表の冒頭に全体傾向として示すことにする。縦軸の記号の括弧内の数字は、平等観の選択者の実数をあらわしている。(但し高校生のa-cは、無回答者を含む)

表5 [平等と学区規制、高校生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	28.4 (83)	21.9 (64)	31.9 (93)	9.3 (27)	7.2 (21)
a-c (45)	22.2 (10)	20.0 (9)	40.9 (18)	11.1 (5)	4.4 (2)
a-d (39)	41.0 (16)	20.5 (8)	23.1 (9)	12.8 (5)	2.6 (1)
b-c (25)	32.0 (8)	32.0 (8)	24.0 (6)	4.0 (1)	8.0 (2)
c-d (35)	20.0 (7)	37.1 (13)	28.6 (10)	5.7 (2)	5.7 (2)

クロス集計であるため、それぞれの選択者の実数は少なくなってしまうが、ここでは全体傾向を念頭に置きながらその特徴を見ていくことにする。全体傾向で「反している」「どちらかといえば反している」(1+2)は、50.3%である。それよりも多いのは、b-c (64%)、a-d (61.5%)、c-d (57.1%)である。この3つに大差ないのが特徴的である。しかし、その中でもa-dの「反している」41.0%は目につく。a-cは40.2%は全体傾向を下回り、3の「どちらともいえない」が多い。a-cは判断保留を選択しているのである。a-dは素朴実質的平等と名づけた平等観の持ち主で、d(社会的弱者)として身近かな他者を意識しているのではないかと先に分析した。41.0%はそれを示しているのではないだろうか。同じdを含んでいるc-d(形式的・実質的平等併立)やb-c(客観的形式的平等)は、1の「反している」を選ぶものが、a-dグループより少ない。b-c、c-dグループは事柄を外から見て、やや客観的に評価しているからではないだろうか。結論を急がず、大学生と比較してみよう。

表6 [平等と学区規制、大学生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	21.3 (59)	26.4 (73)	35.4 (98)	11.9 (33)	5.1 (14)
a-c (32)	25.0 (8)	25.0 (8)	31.3 (10)	12.5 (4)	6.3 (2)
a-d (17)	29.4 (5)	23.5 (4)	41.2 (7)	5.9 (1)	0 (0)
b-c (44)	11.4 (5)	34.1 (15)	43.2 (19)	9.1 (4)	2.3 (1)
c-d (37)	18.9 (7)	21.6 (8)	37.8 (14)	10.8 (4)	10.8 (4)

高校生と比べると、各平等観持ち主で「反している」(1+2)を選択する者が、a-cを除いて10%前後低下し、「どちらともいえない」を選択するものが増えている。この問題に関してはクールな評価をしていることが特徴的である。全体傾向より「反している」(1+2)が若干ではあるが上回っているのはa-d (52.9%)、a-c (50%) ぐらいである。他は僅かではあるが全体傾向を下回っている。客観的・抽象的に形式的平等を志向するb-cは、3の「どちらともいえない」という判断保留が半数近くあることが目立ち、形式的・実質的平等の両者を志向するc-dが「反していない」という選択が全体傾向の2倍余りあることが目につくぐらいである。しかし、1の「反している」だけを見れば、高校生と同じように、a-dグループよりも、b-c、c-dのグループは10%近く少ない。これらのグループにとって学区選択問題は既に「通り過ぎた」問題であるばかりではない。自己を脇において、客観的な判断基準を事態に適用させていると考えられる。もう少し、遠い問題との関連の中で考えてみよう。

表7 [平等と能力給、高校生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	16.4 (48)	11.6 (34)	28.8 (84)	16.8 (49)	25.7 (75)
a-c (45)	18.2 (8)	13.6 (6)	43.2 (19)	9.1 (4)	15.9 (7)
a-d (39)	17.9 (7)	12.8 (5)	41.0 (16)	15.4 (6)	12.8 (5)
b-c (25)	24.0 (6)	12.0 (3)	12.0 (3)	16.0 (4)	36.0 (9)
c-d (35)	11.4 (4)	5.7 (2)	25.7 (9)	31.4 (11)	25.7 (9)

高校生にとっては、具体性にかける問題ではあるが、勤続年数も同じで同一労働でありながら、能力給が採用されているという今日一般にみられる人事管理を各平等観からどのように評価しているかを明らかにするのが、このクロス集計の趣旨である。

「反している」(1+2)は、a-c、a-dの平等観の持ち主は全体傾向と差がないが、b-cグループは「反している」を選択するものが多く、逆にc-dグループは少ない。つまり、1と2を合わせると、全体は28.0%であるのに対して、b-cは36.0%、c-dは17.1%でしかない。逆に、「反していない」(4+5)を選択する者は、a-cとa-dに少なく、b-cとc-dに多くなっている。4と5を合算すると、全体が42.5%であるのに対して、a-cは25%、a-dは28.2%でしかない。そして、この両者は3の「どちらともいえない」を40%以上が選択しているのである。それに対して、b-cとc-dは50%以上が反していないと回答している。また、5の「反していない」だけを取り出すと、先の学区問題と同様に、a-c、a-dグループとb-c、c-dグループ

に大きな差があることがわかる。前者は「反していない」を選択する者が少なく、後者は多いのである。その差は10%余りになる。

形式的であろうと実質的であろうと、素朴平等観の持ち主は能力給であることに對して、判断保留が多くなり、このグループの高校生は「反している」「反していない」がほぼ拮抗して登場するのである。客観的形式的平等観の持ち主は、「反していない」を選択する者が多く、形式的・実質的平等の両方を求める者も、「反していない」を選択する者が多く、「反している」を選ぶ者が少ないのである。素朴平等観が上記のような選択をするのは、問題が自己との係わりが少ないことから説明ができよう。客観的形式的平等は、形式・実質併立よりも、具体的な人（dの「社会的弱者」）を視野から除外し、抽象的・形式的に判断するために、上記のような結果を生み出すのではないだろうか。

表8 [平等と能力給、大学生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	8.7 (24)	5.8 (16)	19.5 (54)	28.2 (78)	37.9 (105)
a-c (32)	3.1 (1)	3.1 (1)	25.0 (8)	46.9 (15)	21.9 (7)
a-d (17)	5.9 (1)	0 (0)	35.3 (6)	29.4 (5)	29.4 (5)
b-c (44)	6.8 (3)	4.5 (2)	13.6 (6)	36.4 (16)	38.6 (17)
c-d (37)	10.8 (4)	5.4 (2)	21.6 (8)	24.3 (9)	37.8 (14)

上記の表からわかるように、高校生と比較すると、大学生の方が能力給であることを平等の原則に反していないと回答する率が高いのが特徴である。能力給を肯定・容認する傾向がある。高校生で、大学生と似た傾向を示しているのが、c-dグループぐらいである。

大学生のa-c、a-dの素朴な平等観の持ち主は、能力給であることに對して、平等の原則に「反している」と回答するものが少なく、「どちらともいえない」を選択するものが多い。a-cは5の「反していない」を選択する者が少ないが、4と5を合わせると68.8%になり、全体（66.1%）と大差はない。a-dは「反している」が5.9%と全体よりも少ない。したがって、能力給を肯定する者が多いようであるが、3の「どちらともいえない」が14%余り全体傾向よりも多いことが注目される。形式的・実質的平等の両者を求めるc-dグループは、「反している」（1と2）は、16.2%と全体傾向（14.4%）よりわずかではあるが上回り、逆に「反していない」（4と5）は、全体（66.1%）わずかに減少しているが、全体傾向と大差ないといってよいだろう。「社会的弱者を生み出さない」というdという要素が、全体傾向との一致に近づけているといえよう。それに対して、客観的形式的平等を志向するb-cは、「反していない」（4+5）が75.0%と、全体傾向より10%近く多いのが特徴的である。ここでも、高校生と同じように、b-cグループの判断の「まよいのなさ」がめにつくところである。

表9 [平等とごみ処理場建設、高校生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	26.4 (77)	15.8 (46)	42.5 (124)	5.1 (15)	8.9 (26)
a－c (45)	22.2 (10)	13.3 (6)	55.6 (25)	2.2 (1)	4.4 (2)
a－d (39)	30.8 (12)	17.9 (7)	41.0 (16)	2.6 (1)	7.7 (3)
b－c (25)	20.0 (5)	12.0 (3)	36.0 (9)	8.0 (2)	24.0 (6)
c－d (35)	20.0 (7)	14.3 (5)	34.3 (12)	20.0 (7)	6.6 (3)

表10 [平等とごみ処理場建設、大学生]

平等／評価	1	2	3	4	5
全体傾向	18.1 (50)	22.8 (63)	44.4 (123)	9.4 (26)	5.4 (15)
a－c (32)	18.8 (6)	31.3 (10)	34.4 (11)	12.5 (4)	3.1 (1)
a－d (17)	41.2 (7)	17.6 (3)	23.5 (4)	11.8 (2)	5.9 (1)
b－c (44)	25.0 (11)	22.7 (10)	38.6 (17)	9.1 (4)	4.5 (2)
c－d (35)	27.0 (10)	21.6 (8)	37.8 (14)	10.8 (4)	2.7 (1)

自分の町によその町のごみを処理する処理場が建設されることの評価を聞いた問題である。この問題は、今までの問題場面と異なり、町全体にかかわるけれども個人の利害と直結しているわけではない。したがって、3の「どちらともいえない」という判断保留が多くなり、全体傾向も高校生・大学生も大差ないのが特徴である。実際に全体傾向では「反している」(1+2)「どちらともいえない」「反していない」(4+5)は、高校生では42.2%、31.5%、14.0%であるのに対して、大学生は40.9%、44.4%、14.8%である。大学生の判断保留が目立つぐらいである。

判断保留が多いと述べたが、高校生にあってはa－cグループは全体よりも10%以上多いが、大学生のa－c、a－dグループは10%以上少ない。その部分が「反していない」にまわっているのである。その点では、大学生の素朴平等観は自己中心的傍観者ではなく、自己に正直に問題解決をしようとしている態度の表れとも解釈できよう。

a－dとb－c、c－dを比較してみよう。高校生も大学生もa－dの方がb－c、c－dグループよりも10%前後「反している」(1+2)が上回っている。そこに素朴平等観の強さを見いだすことができよう。また、高校生のb－c、c－dグループの「反していない」の選択(4+5)は、全体傾向の2倍以上になっている。高校生の感覚的反応が、こうした問題を解決するバネになりうるのではないだろうか。逆に、大学生の「反している」(1+2)が、a－dとb－c、c－dが10%以上離れていることが気になるところである。そこに大学生のバランス感覚と評価しうる点もあるが、事態を遠くから眺めている姿勢が気になるところである。

5 中間的まとめ

平等に関するイメージや考えから、高校生・大学生の平等観をその量的な側面に着目して、素朴形式的平等(a－c)、素朴実質的平等(a－d)、客観的形式的平等(b－c)、形式的・実質的平等の4タイプを抽出してみた。高校生はa－c、a－d、c－dが多く、大学生はb－c、c－dが

多いことを明らかにした。この4つの平等観の持ち主が具体的問題場面をどのように評価しているのかを明らかにしようとしたのが、いままでの課題であった。それぞれ問題場面が異なるが、各平等観の持ち主によって、その評価がどのように異なるのかをあきらかにしようと試みた。

仮説として、身近かな他者を意識している素朴実質的平等観の持ち主と、問題を抽象的・形式的な尺度でとらえようとする客観的形式的平等観では、その評価が異なるのではないかと考えてみた。

その結果、第一に当然のことであるが、高校生と大学生の問題による評価の相違である。高校生は学区選択には敏感に反応するが、能力給には大学生に比して反応が分散する傾向がある。しかし、個人の利害と直結していないごみ焼却場問題に関しては、大学生と同じ評価を下していることである。換言すれば高校生は身近かな問題に関しては自己や身近かな他者を思い浮かべて評価し、大学生は抽象度を高くして、客観的に評価しようとしていることである。

第2に、問題場面によって高校生と大学生の評価の相違はあるが、素朴平等観の持ち主と客観的形式的平等観の持ち主と分けてみると、どの問題場面でも高校生も大学生も共通する傾向があることである。第3に、素朴な平等観の持ち主、とりわけa-dの実質的平等観の持ち主は身近かな問題（表5・6）に関して評価が明確であり、遠い問題に関しては（表7・8）評価が鈍くなる傾向がある。それに対して、客観的形式的平等観の持ち主や形式的・実質的併立の平等観の持ち主は、身近かな問題に関してはクールな反応を示し（表5・6）、遠い問題に関しては明確な判断を下す傾向ある（表7・8）。

第4に個人の利害と直結しない問題（ごみ焼却場）に関しても、表9・10に示されるように、a-dグループとb-c、c-dグループの差を見ることが出来る。第5に、以上のことはa-dグループは身近かな他者を視野に入れ、具体的に事態をとらえ・評価しようとし、b-cグループは事態を遠くから客観的にとらえ、判断する傾向性を物語っている。このように、事態をとらえる構え（平等観）によって評価が異なってくることが立証できたといえよう。

次に、もっと複雑な場面において判断と解決策をどのように選択しているか分析してみよう。

6 平等と具体的な問題解決場面

(1) 本項の目的

本項の目的は、平等のイメージと具体的な問題場面における判断と解決策との関連性を明らかにすることである。

本研究の基礎資料である人権意識に関する調査調査では、つぎの5つの問題解決場面を設定した。一般的個人的な問題場面、自ら関わり合う問題場面、一般的集団的な問題場面、国家的な問題場面、そしていわば等身大の日常的個人的な問題場面の5つである。各場面ごとに、A群とB群との選択肢を設けて、それぞれ1つ回答してもらった。A群は判断する立場を問うものであり、B群は解決策を問うものである。

本項では、一般的個人的な問題場面、将来自ら関わるであろう問題場面、という2つの問題場面を考察の対象とした。というのは、後者の問題場面の具体的な設問内容は後にゆずるが、それは言い換えると一般的集団的な問題場面でもあるからである。つまり個人的な問題場面と集団的な問題場面との対比の中で、本項の課題に答えようとするのである。

また前項までの考察で、 $a-c$ （素朴形式的平等）、 $a-d$ （素朴実質平等）、 $b-c$ （客観的形式的平等）、 $c-d$ （形式的実質平等）が特徴的な組み合わせであることが、明らかにされた。本項でも、それら4つの平等観に着目する。

さて、高校生・大学生はどのような選択をしているのであろうか。

(2) 平等と一般的個人的な問題場面

「あなたの住んでいる家が、道路建設のために立ち退きをせまられたとします」という場面を設定した。選択肢は、以下の通りである。選択肢は簡略化し、括弧内はカテゴリーを示す（以下同様）。

判断を問うA群では、 a ：道路建設はみんなの生活を便利にするので、少しぐらいの不利益は我慢するであろう（利他） b ：たとえみんなのためになったとしても、長く住んでいた家を移転させられるのはいやなので、できるだけ建設に反対するであろう（利己） c ：道路建設を認めて、移転にあたっての保障を充分満たされるように努めるであろう（功利） d ：道路建設が本当にみんなのためかを考えて、態度を決めるであろう（価値）

解決策を問うB群は、 a ：地域の有力者に便宜を依頼する（他者依存）、 b ：移転しなければならない者の数を考えて態度を決める（過程）、 c ：たとえ一人でも納得のいくまで交渉しようと努める（主体性）、 d ：周りの人からどう思われようと、納得のいく移転条件を獲得する（結果）、 e ：あまり波風を立てないようにする（過程）

つぎに、平等と判断と解決策とをクロスさせるが、具体的な問題場面を考察しているために、全体の傾向は複雑なものとなっていると思われる。そこで、先述の4つの平等観が判断と解決策それぞれでどのような傾向を示すか分析しておきたい（以下、数値の単位は全て％であり、小数第2位を四捨五入。かつこ内の数字は実数、またはカテゴリー。以下同様）

(2)－1、平等と一般的個人的な問題場面における判断

表11 道路建設 A群（判断） 高校生

平等／判断	a (利他)	b (利己)	c (功利)	d (価値)
全体傾向	2.7 (8)	27.0 (79)	32.8 (96)	34.8 (102)
$a-c$ (45)	0 (0)	34.1 (15)	25.0 (11)	40.9 (18)
$a-d$ (39)	2.6 (1)	31.6 (12)	34.2 (13)	31.6 (12)
$b-c$ (25)	4.0 (1)	28.0 (7)	44.0 (11)	24.0 (6)
$c-d$ (35)	0 (0)	22.9 (8)	31.4 (11)	5.1 (15)

$a-c$ の平等観を持つ者は、 d (40.9)、 b (34.1)、 c (25.0) の順で選んでいる。特に d と c との差 (14.9) が目立つ。 $a-d$ は、 a 以外の選択肢をほぼ同数の者 (約32％程度) が選んでいる。 $b-c$ は、全体傾向と比較しても、 c を選ぶ者が多く (44.0)、 b と d を選んだ者との差が約20％弱ある。 $c-d$ は、 b を選んだ者が d (35.1) や c (31.4) と比べて、若干だが少ない (22.9) といえる。

表12 道路建設 A群（判断） 大学生

平等／判断	a (利他)	b (利己)	c (功利)	d (価値)
全体傾向	1.1 (3)	12.3 (34)	0.2 (139)	36.5 (101)
a - c (32)	0 (0)	12.5 (4)	59.4 (19)	28.1 (9)
a - d (17)	0 (0)	17.6 (3)	17.6 (3)	64.7 (11)
b - c (44)	0 (0)	22.7 (10)	40.9 (18)	36.4 (16)
c - d (37)	0 (0)	10.8 (4)	54.1 (20)	35.1 (13)

a - cでは、cを選ぶ者が多く（59.4）、次いでd（28.1）を選んでいる。だが全体傾向からすると（36.5）、dを選ぶ者が多くはない。a - dでは、dを選ぶ者が半数以上を占めている（64.7）。b - cでは、c（40.9）とd（36.4）がひとつの山を作り、次いでb（22.7）である。

c - dでは全体傾向とはほぼ同じ選択傾向を示して、c（54.1）とd（35.1）に集まっている。

高校生と大学生を比較してみる。

a - c（素朴的形式的平等）において、高校生の多くは価値を選び、逆に功利を選ぶ者が少ない。一方大学生は価値を選ぶ者が高校生よりも減少して、逆に功利を選ぶ者が増えている。高校生はa（素朴的）に、大学生はc（形式的）に重きを置くからであろうか。またa - d（素朴的実質平等）において、高校生は、bの利他以外ではほぼ均等な選択傾向を示した。一方、大学生の2／3が価値を選んでいる。高校生はa（素朴的）に、大学生はd（実質的）に重きを置いたように思われる。b - c（客観的形式的平等）において、高校生は、功利を選ぶ者が突出しているが、大学生では功利と価値がほぼ拮抗している。c - d（形式的実質平等）では、大学生は高校生と比して約20％増で功利を選ぶ者がいる。

(2) - 2、平等と一般的個人的な問題場面における解決策

表13 道路建設 B群（解決策） 高校生

平等／解決策	a (他者依存)	b (過程)	c (主体性)	d (結果)	e (過程)
全体傾向	5.5 (16)	8.9 (26)	39.2 (115)	34.5 (101)	7.2 (21)
a - c	7.0 (3)	11.6 (5)	34.9 (15)	39.5 (17)	7.0 (3)
a - d	15.3 (2)	5.8 (6)	44.7 (17)	26.3 (10)	7.9 (3)
b - c	4.5 (1)	4.5 (1)	50.0 (11)	36.4 (8)	4.5 (1)
c - d	8.8 (3)	2.9 (1)	38.2 (13)	44.1 (15)	5.9 (2)

a - cでは、全体傾向とはほぼ同じ結果となって、d（39.5）とc（34.9）を選ぶ者が多い。a - dでは、cを選ぶ者が目立って多く（44.7）、次でd（26.3）、b（15.8）を選んでいる。だが、dを選ぶ者は全体傾向（34.5）からすると若干ではあるが少なく、逆にdを選ぶ者は全体傾向（8.9）より若干多い。またb - cの半数がc（50.0）を選び、次いでd（36.4）である。またbを選ぶ者は少ない（4.5）。そしてc - dでは、d（44.1）あるいはc（38.2）に選択のひとつの集まりがあるが、bを選ぶ者は少ない（2.9）。

表14 道路建設 B群（解決策） 大学生

平等/解決策	a（他者依存）	b（過程）	c（主体性）	d（結果）	e（過程）
全体傾向	4.0（11）	10.5（29）	31.0（86）	37.9（105）	14.1（39）
a－c	3.1（1）	15.6（5）	40.6（13）	28.1（9）	12.5（4）
a－d	1.8（2）	11.8（2）	5.9（1）	41.2（7）	29.4（5）
b－c	4.8（2）	11.9（5）	31.8（16）	42.9（18）	2.4（1）
c－d	5.4（2）	8.1（3）	37.8（14）	37.8（14）	10.8（4）

a－cではcを選ぶ者が多く（40.6）、次いで差が開いてd（28.1）が多い。またbを選ぶ者は全体傾向（10.5）からすると、やや多い（15.6）。a－dでは、dを選ぶ者が多く（41.2）、次いで差が開いてeが多い（29.4）。b－cでは、dを選ぶ者が多く（42.9）、次いでc（31.8）である。またb－cで目立つのは、eを選ぶ者の少なさ（2.4）である。c－dでは、cとdを選ぶ者が同数（37.8）である。

解決策における高校生と大学生を比較してみる。

a－c（素朴形式的平等）において高校生では、主体性と結果を選ぶ者が多い。大学生は主体性を選ぶ者がより増加し、結果を選ぶ者が減少する。素朴形式的平等観を持つ大学生の方が問題解決にあって、より素朴であるといえるのではないか。a－d（素朴実質平等）において高校生では、主体性を選ぶ者が約半数弱である。ところが大学生になると主体性を選ぶ者が減少して、eの過程（いわば非主体的な解決策）を選ぶ者が増加する。またb－c（客観的形式的平等）において、高校生の半数が主体性を選ぶが、大学生では主体性を選択する者は減って結果を選ぶが増える。また大学生ではeの過程（いわば非主体的な対処）を選ぶ者が激減する。c－d（形式的実質平等）において高校生と大学生はほぼ同じ傾向を持ち、結果あるいは主体性を選んでいる。

(2)－3、平等と一般的個人的な問題場面における判断と解決策

ここで判断と解決策をまとめると、素朴形式的平等は学年段階が上がると、より素朴さに重きをおく傾向がある。素朴実質平等では、高校生は大学生に比べて、“素朴的”に重きをおき、大学生は実質的に重きをおいている。大学生の方が素朴的から客観的へ移行しているといえるだろう。だがそのために実質へ寄りかかった解決策を求めてしまい、問題解決の方途を見いだせず、非主体的になる傾向を持つのではないか。また、客観的形式的平等では、高校生の方が、大学生よりも主体的ではあるが操作的な対処をする傾向を示した。そして形式的実質平等でも高校生と大学生との著しい相違はないが、大学生の方が実質に重きを置くためか、非主体的な解決策を求める傾向性を持っている。

形式的平等観は主体性を、実質平等観は非主体性を促す傾向にある。また素朴さは学年段階にともなってより主体性を増すようになる。どうしてそのような傾向を示すのかは、つぎの問題場面对する分析を経て考察してみたい。

(3) 平等と、将来自ら関わるであろう問題解決場面

自ら将来関わるであろう問題場面では、高校生と大学生は、自らの平等観をどのような関連性を持って対処するであろうか。

「あなたの職場で、出産して子どもができれば退職するという約束で入社した女性が、出産後も働き続けたいと希望し、退職をせまる会社と対立しています」という設問に回答してもらった。

選択肢は、簡略化して示す。

判断を問うa群では、a：その女性に会社と話し合っ、退職条件を良くするようにすすめる（功利）、b：入社時の約束だから、退職するべきであると考え（契約）、c：たとえ入社時の約束でも女性差別だから、退職すべきでないと励ます（価値）、d：その女性の人柄や働きを考えて判断する（利己）

解決策を問うB群は、a：職場の他の人達の意見をよく聞いて、自分の態度を決める（他者依存）、b：労働組合がその会社になくときは、あきらめざるをえないと考える（自己合理）、c：周囲を説得して、その人が勤務を継続できるように努める（主体性）、d：交渉が長引き、やっかいな問題なので、できるかぎりかわらないようにする（結果）

(3)－1、平等と自ら関わり合う問題場面における判断

さて、(2)の分析と同じように平等と判断及び解決策をそれぞれクロスさせてみる。

表15 結婚退職 A群（判断） 高校生

平等／判断	a（功利）	b（契約）	c（価値）	d（利己）
全体傾向	8.2 (24)	27.6 (81)	22.2 (65)	39.6 (116)
a－c	8.9 (4)	13.3 (6)	24.4 (11)	51.1 (23)
a－d	0.3 (4)	28.2 (11)	23.1 (9)	38.5 (15)
b－c	4.0 (1)	28.0 (7)	20.0 (5)	44.0 (11)
c－d	5.7 (2)	37.1 (13)	28.6 (10)	25.7 (9)

a－cでは特にdを選ぶ者が多い（51.1）のが目立ち、次いでc（24.4）、b（13.3）の順である。a－dでは、ほぼ全体傾向と同じ結果であり、d（38.5）、b（28.2）、c（23.1）の順である。また、aを選ぶ者が、他の平等観と比して若干だが多い（10.3）。b－cでは、dを選ぶ者が多く（44.0）、次いでb（28.0）、やや差が開いてc（20.0）と続く。c－dでは、一番高い数値を示したのはbであることが、目立つ（37.1）。次いで、ほぼ同数でc（28.6）、d（25.7）がひとつの集まりを作っている。まとめると、a－cの特徴は、半数以上の者がdの利己を選んだのであり、またbの契約を選ぶ者は少ないことである。またa－dとb－cは同じ選択傾向を示した。だがa－dの方はaの功利を選ぶ者がやや多く（5.5の差）、b－cの方は利己を選ぶ者がやや多い（7.3の差）といえる。そしてc－dは、他の平等観と比して、契約を選ぶ者が一番多い（37.1）。

表16 結婚退職 A群（判断） 大学生

平等／判断	a（功利）	b（契約）	c（価値）	d（利己）
全体傾向	11.6 (32)	23.5 (65)	16.6 (46)	48.4 (134)
a－c	6.3 (2)	25.0 (8)	25.0 (8)	43.8 (14)
a－d	0 (0)	29.4 (5)	17.6 (3)	52.9 (9)
b－c	20.5 (9)	18.2 (8)	18.2 (8)	43.2 (19)
c－d	10.8 (4)	18.9 (7)	18.9 (7)	51.4 (19)

a-cでは、dを選ぶ者が多く（43.8）、次いでbとcが同数で（25.0）でかなり差が開いてa（6.3）の順である。aの功利を選ぶ者が少ない（6.3）のではないかとも思える結果である。a-dでは、d（52.9）が多く、b（29.4）、c（17.6）でdを選ぶ者はいなかった。b-cでは、d（43.2）が多く、次いでa（20.5）が同数のbとc（18.2）と並んでいるのが特徴である。c-dでは、d（51.4）が多く、次いでbとcが同数（18.9）で、a（10.8）の順である。

高校生と大学生を比較してみる。

a-cにおいて、高校生ではbの契約を選ぶ者が大学生と比してその差が約12%ある。またa-cにおいて大学生でdの利己を選ぶ者が高校生と比して、8.5%減っている。a-dでは、大学生の母数自体が少ないので確定的なことはいえないが、それでもdの利己を選ぶ者は、大学生の方が高校生よりも増加しているといえるであろう。b-cにおいて高校生と大学生とで契約を選ぶ者の比率は、ほぼ同じだといえよう。また、大学生でaの功利を選ぶ者が、高校生よりも15.5%多い。c-dにおいて高校生は、bの契約を選ぶ者が多く、大学生の半数強は利己を選んでいる。

まとめると、a-c（素朴形式的平等）において高校生は、大学生と比して契約よりも価値を選ぶ者が多い。またa-cの大学生は、高校生と比して利己をやや弱めて、かつ契約を選ぶ者が増えている。先の問題場面とは異なって、大学生よりも高校生の素朴さは、当事者の利益を引き出そうとする傾向を見せている。a-d（素朴実質平等）において、母数の少なさという既述の理由で、大学生の方が利己を選ぶ割合がやや多いという指摘に、ここではとどめておく。b-c（客観的形式的平等）において高校生はcの形式的平等を強めて選択しているといえよう。一方、大学生が功利を選ぶのは、会社との交渉が困難さを認識しているといえるだろう。またc-d（形式的実質平等）において、高校生は契約を選びつつも価値を選ぶ傾向を示している。人権問題として把握する上では、健全だといえる。それはdの実質的を強めて選んだのである。一方、大学生では、利己を選ぶ者が顕著に多いといえよう。それは会社との交渉という難題に対して、大学生は取りあえず自己の身分保障を優先させたのであろうか。早急な結論を出す前に、解決策を分析してみたい。

(3)-2、平等と自ら関わり合う問題場面における解決策

表17 結婚退職 B群（解決策） 高校生

平等／判断	a（他者依存）	b（自己合理）	c（主体性）	d（過程）
全体傾向	31.7（93）	14.7（43）	29.7（87）	16.4（48）
a-c	41.5（17）	17.1（7）	26.8（11）	14.9（6）
a-d	32.4（12）	18.9（7）	35.1（13）	13.5（5）
b-c	21.7（5）	13.0（3）	43.5（10）	21.7（5）
c-d	34.4（11）	25.0（8）	28.1（9）	12.5（4）

a-cで目立つのは、aを選ぶ者が多いことである（41.5）。次いでやや差が開いてc（26.8）、そしてほぼ同数のb（17.1）とd（14.9）が続く。a-dでは、cとaとがほぼ同数であり、その後b（18.9）とd（13.5）のひとかたまりがある。b-cでは、cを選ぶ者が多い（43.5）のが特徴といえる。そのあとに、aとdとが同数（21.7）で続き、更にb（13.0）である。c-dでは、a（34.4）

とc (28.1) b (25.0) とがまとまりを作っており、そのあとにd (12.5) と続く。まとめると、a-cとc-dが、それぞれ一番多く選んだのは、aの他者依存である。またcの主体性を一番多く選んでいるのは、b-cである。そしてa-dは他者依存と主体性をほぼ同数で多く選んでいるのである。他者依存と主体性に着目すると、他者依存的な選択をするのはa-cで、主体的なのはb-cだといえる。a-dは、他者依存と主体性を併存させており、c-dは自己合理を選ぶ者が他の平等観に比して多いといえる。それは、つまり、高校生はc (形式的) を強めた場合主体的になり、d (実質的) を強めると他者依存になる傾向を示している。

表18 結婚退職 B群 (解決策) 大学生

平等/判断	a (他者依存)	b (自己合理)	c (主体性)	d (過程)
全体傾向	39.0 (108)	15.5 (43)	25.3 (70)	17.3 (48)
a-c	32.3 (10)	25.8 (8)	29.0 (9)	12.9 (4)
a-d	23.5 (4)	11.8 (2)	35.3 (6)	29.4 (5)
b-c	46.5 (20)	16.3 (7)	25.6 (11)	11.6 (5)
c-d	43.2 (16)	21.6 (8)	21.6 (8)	13.5 (5)

a-cでは、a (32.3) とc (29.0) とb (25.8) がまとまりを作っており、その後にd (17.3) が続く。またbを選んだ者は全体傾向 (25.3) からみると多いといえよう。a-dでは、c (35.3)、d (29.4)、a (23.5)、b (11.8) の順である。b-cでは、aを選んだ者が約半数弱 (46.5) おり、次いでc (25.6) が続き、少し差が開いてb (16.3) とd (11.6) のまとまりが続く。c-dではaを選ぶ者が多く (43.2)、次いで同数 (21.6) のbとc、d (13.5) の順である。だが実数をみると、同数 (8) のbとc及びd (5) は、僅差なので、それら3つはひとまとまりであるといえよう。他者依存と主体性に着目すると、他者依存的な選択をするのはb-c、c-dで、主体的なのはa-dだといえる。a-cは、他者依存と主体性に加えて自己合理とが併存しているといえよう。

高校生と大学生を比較してみたい。

a-c (素朴的形式的平等) において、高校生は他者依存を選ぶ者が多いが、大学生では他者依存と主体性と自己合理がほぼ同じ割合で選ばれている。高校生は周囲の他者との関係を重視するといえるだろう。一方、大学生の選択がほぼ均等に分かれるのは、他者のみならず会社との関係なども視野に入れるからであろうか。だが、結婚退社という問題について、大学生が契約を選ぶというのは、人権意識として課題があるのではないか。また、a-dにおいて高校生は他者依存あるいは主体性かを選ぶ傾向にある。一方、大学生は主体性ともうひとつの選択として過程を選んでいる (いわば回避的な選択)。繰り返しになるが母集団の実数が少ないので、ひとつのデータとして提示にしておく。さて、b-cにおいて高校生は主体性を選ぶ者が多いが、大学生では他者依存を選ぶ者が多いという対称的な結果を示している。高校生は結婚退職という問題に対して客観的な平等という基軸で解決策を志向するのに対して、大学生は周囲の他者を基軸に態度を決めている。この点については、次項でふれたい。c-d (形式的実質平等) においては、高校生と大学生と選択肢の順位は同じである。ただ大学生では一番多くの者が選んだ他者依存が、高校生に比して約9%多い。

解決策では高校生と大学生は、対照的な結果となった。高校生ではcの形式的を強めると主体

的になり、dの実質を強めると非主体的になっていく傾向がある。大学生はその逆で強まるのがcの場合に非主体的になり、dだと主体的になるのである。

(3)－3、平等と自ら関わり合う問題場面における判断と解決策

さて、判断と解決策とを合わせて考察みたい。

素朴形式的平等観を持つ高校生は、同平等観を持つ大学生と比して、判断では価値を選ぶものが多く、解決策では、他者依存を選ぶ者が多かった。まさに素朴であるために、問題解決の糸口が見つからないのではないか。一方、大学生は、判断では契約を選ぶ者が多い。功利を選んで少しでも当事者の利益を保障しようとする者が少ないのである。高校生と比して、問題場面から自身を離して少し客観的に対処しようとしすぎるのではないだろうか。だから、解決策で高校生と大学生は、形式的と実質的とでは主体性に与える影響が異なるのであろう。問題場面を一般的に理解してしまうから、解決の突破口を形式的平等観（素朴であれ客観的であれ）ではなくて、実質平等に寄りかかった対処を志向するのではないか。だとすると、高校生のほうが個別具体的な理解では問題場面に対処しようとするために、形式的平等観が主体性と結びつくのではないか。だが本当に、そのように言えるのか、最後のまとめで考えたい。

(4) まとめ

問題場面毎に分析結果をまとめておきたい。

一般的個人的問題場面において、高校生で素朴形式的平等観あるいは素朴実質平等観を持つ者は、同じ平等観の大学生に比べて、“素朴的”に重きをおいた対処を図ろうとする。一方それらの平等観を持つ大学生は、素朴的ではなくて、形式的あるいは実質的に重きをおいて対処する傾向をみせた。人権意識という観点からすると大学生の方が、発達しているといえるだろう。

だが、客観的形式的平等観に目を転じると、高校生は、大学生よりも、主体的で形式的な対処をする傾向を示した。また形式的実質平等観においても、大学生は高校生と著しい相違はなかった。

また、将来自ら関わるであろう問題場面では、高校生で素朴的形式的平等観は、素朴さゆえに問題場면을解決しえないためであろうか、自己保身に走る者が多い。大学生は入社時の契約であるからとして自己関与をさけるように思われる。素朴の実質平等観と形式的実質的平等観の高校生は、規範を軸に解決を図ろうとする姿勢を示した。大学生はやはり自己関与を避ける方向性を取る者が多い。客観的形式的平等観では、高校生はやや問題解決の困難さが認識されるのか、選択肢が客観的を強めて平等性を軸に選択する傾向を弱めるが、主体的に解決しようとしている。一方、大学生は問題の困難さを充分認識するためか、功利を強めて現実的な解決を図ろうとしている。

さて、素朴な平等観に関していえば、本項では、大学生、高校生を問わず、素朴さは主体性と結びつくときもあるが、解決の困難さの度合いが増すと、非主体的になってしまうことも、明らかにしてきた。それは素朴さゆえであろう。従って、客観的な側面を持った平等観が必要だろうと思う。

だが、本項はまた、客観的な平等観を持つ大学生に対して、つぎのような傾向を指摘してきた。一般的な問題場面での判断という比較的に抽象度が高い場合には、自らの平等観と関連性の高い対処を図るが、さらに自己関与が求められてくる場面では、状況依存的な観点に基づく傾向を持っていること、である。が、果たしてそういえるのであろうか。

ここで、本項の基礎資料となっている調査の中にある、ひとつの設問の結果に着目したい。その設問とは、「一票の格差は法の下での平等に反するか」というものである。「特にそう思う」から、「特にそう思わない」を5段階で回答してもらった。

「特にそう思う」と回答する大学生は、形式的実質平等（32.4）、素朴実質平等（29.4）、素朴形式的平等（25.0）、客観的形式的平等（23.3）とほぼ横並びで、ついで競争的形式的平等（15.4）の順であった。比率の順が、実質平等から形式的平等へととなっているのは、平等のイメージに基づいた判断だと解釈できよう。だが、法の下での平等に反するという回答が全体としてももう少し多くてもよいと思われるのだが、そのような結果になっていない。競争を重視する平等観が回答率が低いことが示めすように、あまりにも自らの平等観と一致すぎとはいえないだろうか。

そのように分析してみると、大学生は、一般的理念的に平等観も問題場面も把握する傾向があるといえよう。それは確かに客観的ではあるが、具体的な場面しかも解決が容易にはなされない場面であるほど、なおかつそこに自己関与が求められると、その平等観では対処しきれなくなってしまうことも多々あるだろう。そうした場合、解決できないと投げ出さないためには、高校生のよう、形式的平等を具体的な場面の中で様々な事柄を考慮しつつ、対処していくことが必要だといえるのではないだろうか。

7 今後の課題

高校生・大学生の平等を軸として問題場面における評価と問題解決場面における判断と解決策を分析してきた。それぞれの結果は中間まとめ及びまとめで述べてきたが、それをふまえて、より一般的な形にここではまとめ、今後の課題を述べることにする。人権意識の発達というレベルからみれば、大学生に多く見られた客観的形式的平等観は、その一般性・抽象性・普遍性の点から適用範囲も広く望ましい到達点をしめしているように考えられる。しかし、いままで分析してきたように、こうした平等観は事態を外から・客観的にとらえようとするだけに、直面する問題との距離があった。逆に、高校生にみられた素朴な平等観は、たしかに事態に身近な他者を思い浮かべ、自分に関係する問題として主体的に関与する姿勢を読み取ることができるが、その適用範囲は狭いといえよう。

このことは、今日の人権教育に即していえば、前者は参加・活動型の人権教育をとおして、人間の自由と平等に気づいていくことにあたり、後者は差別の現実学び、差別される人々と共に生きる人権教育にあたるといことができる。私たちは今回の分析をとおして、この二つの側面は人権教育の両輪にならねばならないという、平凡な結論を再確認することになった。

今後、この調査を今回省いた自由との関連や知識・授業との関連をも含めて分析し、上記の結論の妥当性を検証していきたい。またそれは、現実社会に生起する問題は個々人の平等観によってのみ解決できるわけではない。問題解決の社会的公平性・社会的合意と結びついていることは明白である。公平性・合意形成という視点を導入したとき、個人の人権意識はどこに位置づけるであろうか。こうした視点を導入しながら、再度チャレンジしてみたい。

最後に、本稿は1～5を影山が担当し、6を重松が担当し、7は両者の合作であることを記しておく。

註 ①「中学生の人権意識について（Ⅰ）－現代青少年の人権意識の調査から－」（『横浜国立大学教育人間科学部教育紀要（教育科学）』NO, 2、1999年）